

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：32686

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06666

研究課題名(和文) 室町中後期の吉田家における「家学」の形成と「神代巻抄」の再編に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental research on academic formation of the Yoshida family and reorganization of JINDAIKAN-SHO in the late Muromachi period.

研究代表者

原 克昭 (HARA, Katsuaki)

立教大学・文学部・助教

研究者番号：70318723

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中世日本紀研究を思想史研究から文学研究へと発展継承することを志向したものである。研究目的に沿って成果をまとめると以下の通りである。

資料調査面では、諸機関・各文庫の目録を基盤とした「予備調査」、関連機関における「補助調査」は概ね進捗したが、天理図書館吉田文庫を中心とする「本格調査」の徹底化には及ばなかった。この点は今後の課題としたい。

「神代巻抄」解読と「家学」の実態検証に関しては、国内外の学会・会議における発表・シンポジウム講演を経て論文化に及んだ。国内学会での隣接諸領域との議論、国際学会での研究成果の国際共有など、いずれも研究成果を学際的に提示する有意義な機会となった。

研究成果の概要(英文)：The theme of this research is to inherit the development of Japanese medieval mythology from ideological history research to literary research. The results in line with the research purpose are as follows.

On the materials' investigation side, preliminary investigation based on catalogs and supplementary investigation at related organizations have largely progressed. However, it did not reach the thorough full-scale investigation in the Tenri Library Yoshida Bunko. I would like to point out this point in the future.

Regarding the interpretation of JINDAIKAN-SHO and the examination of the academic affairs of the Yoshida family, I went through papers through presentations at academic conferences both in Japan and abroad. Discussions with neighboring researchers in Japan and sharing results at international academic societies were meaningful opportunities for interdisciplinary presentation of research results.

研究分野：日本中世文芸思想史

キーワード：国文学 中世文学 日本思想史 中世日本紀 神代巻抄

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究テーマと研究履歴

中世における『日本書紀』とくに神代紀とその註釈のありかたを考えたとき、大きくふたつの場面が想定される。ひとつは一対一対応による伝授、もうひとつは複数者を相手にした講釈である。神道書が秘書性を帯びていた中世にあって、前者の伝授形態が「秘説と家学の形成」をうながす素因とみるならば、後者の講釈は形成された「秘説の披露と家学公認」の場であった。その点では、伝授と講釈は、いわば表裏の関係を成す。そして、伝授講釈という学問営為の主たる担い手として「家学」を形成したのが、「日本紀の家」と称された吉田家および清原家である。

この点に関して、研究代表者はこれまで思想史研究の視座から「講釈史」および「進講史」として伝授講釈の諸相を実態的に究明し、単著『中世日本紀論考 註釈の思想史』(法蔵館、2012年5月刊行)を公刊した。鎌倉期から室町期にいたる諸家の「講釈史」の全体像を点綴し、吉田家当主たちによる天皇への「進講史」の軌跡を復原・結像させた点では、一定の成果を挙げたものと思われる。

### (2) 学界現況と研究課題

ただし、如上の研究履歴における依拠資料は主として日記・記録類および調査しえた神道書が中心であり、一連の「神代巻抄」を網羅して反映させるには及ばなかった。その要因として、抄物研究との連動が不十分であった点が指摘される。たしかに、先行する抄物研究では「神代巻抄」を主題化した研究も存するが、大半は漢籍・仏典を典拠とした抄物である。また、往々にして国語学的研究に帰結する論調にあり、思想史研究と有機的に連動させるには未だ十分とはいえなかった。最新の研究では抄物目録の整備や諸本の資料発掘が進み、数多く伝存する一連の抄物資料群を把握する研究環境も整いつつある。

一方、中世文学研究においては、とみに室町期の学問に着目した研究の進展が著しい。もっとも、その多くは儒学家としての「清原家」が中心であり、神道家である「吉田家」の「家学」が本格的に研究対象として指定されるには至っていないのが現状である。

そこで、思想史研究と抄物研究の成果をふまえつつ、複数の「神代巻抄」を基調として「家学」を形成した「室町中後期の吉田家」を焦点化し、伝授講釈の諸相を「神代巻抄」という文献資料から捉え返すことによって、神道家における「家学」の形成過程と抄物にみる言説展開の解明をめざしたのが、本研究の主眼である。

## 2. 研究の目的

本研究は、これまでの研究成果を基盤として、中世における日本紀研究 　　いわゆる

中世日本紀 研究を思想史研究から文学研究へと発展継承することを志向した研究である。室町中後期の神道家、とくに「日本紀の家」と称された吉田家における学問形成と言説展開(「家学」)を、『日本書紀』『中臣祓』に関する抄物資料群(「神代巻抄」)の文献資料と連動させることによって、中世文学研究における学問註釈史の位相を立体的に捉え返す。

「神代巻抄」の資料収集・書誌調査に根ざした中世文学研究の視座から「室町中後期の吉田家」の「家学」の位相を研究することで、以下の点について明らかにすることを研究目的として設定した。

### (1) 「神代巻抄」諸本系統の整理

まずは、吉田家の神道書群を所蔵する天理図書館吉田文庫を中心に「神代巻抄」の諸本収集・書誌調査を遂行し、「神代巻抄」の諸本系統を整理する。

### (2) 「神代巻抄」再編の解読による「家学」形成過程の検証

当座の講義録として筆録された一連の抄物資料群は、口語性を伝える点で国語学的資料的価値はゆるぎないが、抄物の資料的意義はひとえに当座性・口語性に還元されるばかりではない。時として再転写や増補改訂を経て「再編」される抄物も数多く存在するからである。例えば、室町中期の当主・吉田兼俱の講釈の記録が「神代巻抄」として残された場合、次世代の清原宣賢・吉田兼右はそこに「秘説の覚書」や「引用典拠」を書き加えることで、読むに値する一箇の註釈文献として「再編」する場面が見受けられる。そのような「再編」された抄物は、国語学的視座からは口語資料の「衰退」と評価されがちであった。しかし、「神代巻抄」を中世学問史の一環として措定したとき、それはひとたび当座の講義録・聞書として形成された学問が、ふたたび註釈文献として「再編」されていく「家学」形成の軌跡でもある。「再編」された「神代巻抄」は、室町中後期から近世初期にわたる「家学」の継承と展開を窺い知る恰好の資料であり、抄物の文学研究資料としての資料的意義を再開する手がかりともなりうる。本研究を、「家学」の形成と「神代巻抄」の再編に関する基礎的研究」と位置づけた所以である。

### (3) 「神代巻抄」の抄物資料群における位相の究明・研究史の再構築

さらに、抄物の大半は漢籍・仏典を典拠とするが、そのなかにおいて『日本書紀』『中臣祓』という国書を典拠とした「神代巻抄」は、抄物の中でもきわめて特異な存在である。その点、抄物資料群全般における「神代巻抄」の位相を定位し、「神代巻抄」研究史を再構築することも大きな研究課題となる。

如上の研究目的の学術的特色と研究意義を整理すると、以下の二点に集約される。

「神道家」である「吉田家」の「家学」を「神代巻抄」という資料に依拠して検証することにより、思想史研究と中世文学研究のジャンル横断と研究成果の相互交流の可能性を志向した研究である点。

国語学分野における抄物研究の成果を活用しつつ、「神代巻抄」を中世学問史の視座から改めて検証することで、抄物の有する資料的意義の再検討・再開発をめざした研究である点。

上記は、東洋哲学専攻で修めた日本思想史研究の研究手法と成果を日本中世文学・抄物研究へと発展継承する意味において、研究代表者自身の研究歴を反映したものである。これまでの思想史研究を基盤に「神代巻抄」を介して文学研究・抄物研究へと発展継承させることで、研究の新たな視座の獲得と方法論の提唱が期待されるところに本研究の学術的特色と研究意義を見据えた。

### 3. 研究の方法

本研究では、上記の研究目的を達成するための方法として、以下の二点を設定した。

(1) 「神代巻抄」を中心とする抄物資料の収集調査

調査対象とする諸機関・各文庫の位置づけに沿って、「予備調査」「本格調査」「補助調査」と資料調査の性格を明確に区分して遂行した。

まず、調査の効率化・円滑化を図るために諸機関の目録類を再検証し、研究目的の実現に必要な調査対象資料の選定を先行して進める「予備調査」を実施した。その上で、吉田家関連資料の大半を所蔵する天理図書館（吉田文庫）を「本格調査」の対象に位置づけ、清原家の文庫を収蔵する京都大学附属図書館（清家文庫）・慶應義塾大学（斯道文庫）および関連資料を所蔵する名古屋市蓬左文庫・西尾市岩瀬文庫を「補助調査」に据えた。研究期間に鑑みて、2015年度は研究基盤の整備とあわせて「予備調査」、2016年度は「本格調査」「補助調査」を重点的に実施した。

(2) 収集調査した「神代巻抄」の書誌分析と解読研究

資料調査にむけた研究基盤として「神代巻抄」諸本の現況を把握し研究史の再構築をはかるとともに、資料調査の進捗状況に応じて書誌分析と諸本系統の解明および資料解読を進展させた。

また、本研究の足懸として位置づけた学会発表「『日本紀の家』盛衰記・再索 吉田兼見・梵舜の家学と文芸」を基調に本研究の資料調査成果を補填した論文化、および「家学」形成過程の検証、抄物資料群における「神代巻抄」の位相についての提言を発信した。具体的な実践の場として、国内外の学会・研

究所シンポジウム発題を通して研究成果を発信し、研究活動スタート支援としての本研究をより高次元で学際的なレベルへと展開させることをめざした。

### 4. 研究成果

上記の研究目的ならびに研究方法に沿って、本研究課題にかかる国内外での研究成果をまとめると以下の通りである。

(1) 諸機関・各文庫における資料調査

資料調査面では、諸機関・各文庫の目録を基盤とした「予備調査」、関連機関における「補助調査」は進捗し、神代巻抄の伝存状況の大勢を把握する目的は概ね達成された。しかし、天理図書館吉田文庫を中心とする「本格調査」の徹底化には及ばなかった。

神代巻抄の現況を捕捉した成果を活用させながら、個別の書誌調査は今後の課題として着実に継続させてゆく所存である。

(2) 国内学会誌・研究論集における論文化

まず、本研究課題に先立って、2015年5月に開催された中世文学学会シンポジウム「室町期の古典学」において、「『日本紀の家』盛衰記・再策 吉田兼見・梵舜の家学と文芸

」を発題する機会を得ていた。当該発表は、まさしく思想史研究と中世文学研究の相互交流を企図する本研究のスタート・アップ（初期設定）として位置づけられるものである。この発題を基盤に、本研究にかかる資料調査の成果を反映させた定稿は、学会誌『中世文学』（2016年6月）に掲載された。

さらに、「家学」形成過程の研究成果をとりまとめた続編として「吉田家学」の継承者「梵舜」を焦点化した。その研究成果は、論集『日本文学の展望を拓く』（小峯和明編、笠間書院、2017年刊行予定）の第3巻に「神龍院梵舜・小伝 もうひとりの『日本書紀』侍読」と題する論文を寄稿している。

(3) 国内シンポジウムにおける発題

研究期間中に企画されたシンポジウムに参加し、各テーマに合わせて本研究にもとづく研究成果を発題した。

仏教文学学会例会シンポジウム「寺院資料調査から拓く文学研究」は、資料調査と文学研究をきりむすぶことを企図したものである。そこでは、本研究で従事した資料調査研究の位相や意義につき発題した。当該シンポジウムの成果は、学会誌『仏教文学』第42号（2017年4月）に掲載されている。

皇學館大学研究開発推進センター神道研究所シンポジウム「日本書紀の受容をめぐる」は、本研究テーマを発題・共有する恰好の場であった。研究代表者は「『日本書紀』註釈の現場と言説 竟宴・進講・伝授」と題する発表を行い、他のパネラーおよび参加者とともに、思想史・古代史・国文学・国語学にわたる隣接諸領域が相互乗り入れする議論が展開された点で有意義であった。当

該シンポジウムの成果は、機関誌『皇學館大学研究開発推進センター紀要』第4号(2018年3月発行)に掲載される予定である。

(4) 国際学術大会・国際会議における発表・論文化

研究期間中に開催された国際学術大会・国際会議に参加・発表する機会を得て、本研究にかかる研究成果を発題した。

中国人民大学で開催された、第五届・中日韓国国際仏教学術大会は「仏教と伝統思想」をテーマとするものであり、日本側の一員として参加し、「異神の系譜 越境する神々と日本仏教の位相」と題する発表を行った。本発表は「中世日本紀」研究の視座から「異神」を主題化した内容であるが、中国側のコメンテーター・参加者とともに議論する過程で、ひろく「仏教」「道教」をめぐる東アジアの宗教文化圏を捉え返す貴重な機会となった。当該発表は機関誌『東アジア仏教学術論集』(2017年1月)に掲載されている。

日本と東アジアの環境文学 国際会議は、アジア古典文学の視点から「環境」の位相を再捕捉すべく企画された研究集会であり、「宗教言説にみる “アナロジー思考” の諸相と国土・自然環境 神話注釈・寺社縁起を手懸りとして」というテーマ発題をした。本発表では、資料調査によって得られた『日本書紀』注釈資料や吉田家関連の神代巻抄を採りあげ、環境文学の視座から読み返した成果を提示した。本発表は再検証すべき課題もあり未定稿であるが、当該国際会議への継続参加と併せて論文化をはかる所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

原克昭、異神の系譜 越境する神々と日本仏教の位相、東アジア仏教学術論集、第5号、261-281頁、査読無、2017年

原克昭、「日本紀の家」盛衰記・再索 吉田兼見・梵舜の家学と文芸、中世文学、第61号、18-26頁、査読無、2016年

〔学会発表〕(計4件)

原克昭、『日本書紀』註釈の現場と言説 竟宴・進講・伝授、公開学術シンポジウム「日本書紀の受容をめぐって」、皇學館大学研究開発推進センター神道研究所(三重県伊勢市)、2016年12月17日

原克昭、宗教言説にみる “アナロジー思考” の諸相と国土・自然環境 神話注釈・寺社縁起を手懸りとして、日本と東アジアの環境文学 国際会議、北京(中国)、2016年11月26日

原克昭、異神の系譜 越境する神々と日本仏教の位相、第五届・中日韓国国際仏教学術大会、北京(中国)、2016年6月26日

原克昭、寺院聖教目録の再構築と活用方策 いわき宝聚院聖教を基盤として、仏教文学会例会シンポジウム「寺院資料調査から拓く文学研究」、東京工業大学キャンパスイノベーションセンター東京(東京都港区)、2015年12月5日

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原 克昭 (HARA Katsuaki)  
立教大学・文学部・助教  
研究者番号：70318723

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )